【演題】「文化の根底」

[導入]

ある日のテレビ。画面には与党に所属する国会議員の姿が。

彼は次のように発言しました。

「はっきり申しましてね、全部ね出発点は私、安倍さんだと思っているんですよ」

彼は総理大臣と同じ政党に所属しながら、批判の声を上げました。

すると、私の隣にいた友人が次のようなことを言いました。「何言ってるんだ、嫌なら自民党から出ていけばいいのに。党内の和を乱すなよな」と。

私は思いました。

確かに、「政党」とは共通の主義・主張を持つものが、ある目的や理想を達成するため集まった集団です。ですから、同じ政党に所属しているのであれば、その政党の党是のために政治活動を行うことは妥当でしょう。

しかし、同じ政党にいながら批判をすることはダメなのでしょうか？

少し相違があるだけで出ていけと言われるのが政党なのでしょうか？

私はその政党ひいては与党の自由民主党に、ある危機感を抱いています。

それは健全な言論空間の機能を果たしていないからです。

私の造語ですが。私は現在の自民党の状況を「和の暴走」と呼んでいます。

端的に言えば、「和の暴走」とは集団における秩序・調和が過度に求められている状態のことを意味します。

そこで、本弁論では自由民主党という与党の危機的状況、言い換えれば「和の暴走」を明らかにし。また、私たちや政治家はどうすればよいのかを伝えるものであります。

順に説明していきましょう。

［現状分析］

念のために言っておきますが、私は自民党が大嫌いだというわけではありません。

証拠に、私の好きな総理大臣は三木武夫、海部俊樹、宮澤喜一といった自民党メンバーであります。

話を戻しましょう。

周知の通り自民党は与党です。２度ほど政権の座から滑るも、政治学者の升味準之輔先生が「1955年の政治体制」と記しているように、自民党は長らく与党の座に座っています。

そこで私が取り上げるのは、自民党内で批判勢力が形骸化していること。

つまり批判勢力や少数派が声を上げたとしても「後ろから撃つな」「離党しろ」「自民党から出ていけ」と言われる現状です。

まさに「政党」は同じ主義・主張の集団という考えがヒートアップしているのです。そして私はこのような過度に秩序・調和を求める現象を「和の暴走」と名付けました。

さて、ここで皆さんは「私には自民党なんて関係がないぞ」とお思いになっているのではないでしょうか？

確かに、自民党がどうなろうと知ったことではないかもしれません。

ですが、私たちは自民党を支持していようがしていまいが、この政党の影響を受けざるをえません。なぜなら、自民党は与党であり、他党と比べても政権担当能力が高いからです。

悲しいことに、いくら自民党が嫌いでも国民は影響を受けざるを得ないのです。

だからこそ、この弁論の内容は聴衆の皆さんにも関係してくるのです。

［問題性］

では、一体、「政党における和の暴走」のどこが問題なのでしょうか？

端的に言ってしまえば健全な言論空間が作られないということです。

そう、少数派や反主流派が声を上げたとしても、「間違いだ」や「造反者」というレッテル貼りをされ、「後ろから撃つな」や「離党しろ」と言われる。多数派や主流派に反抗する行為は共同体の和を瓦解させる行為だとみなされるのです。そして多数派・主流派の意見が絶対化され少数派・反主流派が声をあげられない、あげにくい環境が作られてしまうのです。

多数派・主流派の意見が誤りだとしても反主流・少数派は濁流の如く飲み込まれ、

組織の自浄作用としての批判勢力は形骸化し、「健全な言論空間」は潰えてしまうのです。

↓（具体化）

実際に自民党内では、そういった雰囲気があると言われています。

例えば、村上誠一郎氏は次のように述べています。

安保法案を反対した際、自民党の中から「アナタの言っていることが正論だよ」とひそかにエールを送ってくれた人がたくさんいた。「だったら一緒に堂々と言ってよ、行動を伴にしてよ」と言ってはみるものの、声を上げて反対しない

また石破茂氏は「自民党はもっと良くならなきゃいけないんじゃないのっていう思いから、党がきちんと国民に信頼されるようにという意見を言うと『お前は後ろから弾を撃つのか』

とか『足を引っ張るのか』とか、すぐそういう話になる」と述べています。

またTwitterなどのネット空間では小泉進次郎氏が批判的な意見を述べている動画に対して、某美容整形外科の院長が「後ろから撃つな」とツイートをしています。

まさに自民党は議論が起こらない、あるいは起こりにくい環境になってしまったのです。

そして例え声を上げたとしても、党内からも党外の国民から批判を受ける。

さらに、野党の現状を鑑みれば、しばらくの間、「不健全な言論空間」としての自民党に国民は頼らざるをえないのです。

もちろん、選挙制度などの影響はあるでしょう。しかし、それを踏まえたとしても党内から批判の声が上がらないのです。

そう、これこそが「和の暴走」なのです！！！

［原因］

それでは、何故このような「不健全な言論空間」が作られてしまったのか。

それは選挙制度の影響を受け党内の派閥が形骸化したからです。

今までの自民党は中選挙区制度のもとに派閥という集団が活発に議論を行っていました。

しかし、選挙制度や小泉純一郎氏の影響を受けて、派閥は形骸化してしまいました。

つまり、選挙制度を戻せば派閥が復活し、議論が起こる政党になるのです。

しかし、注意すべき点は派閥にはプラスとマイナスの両面があるということです。

プラス面は党内で様々な意見があり、その中で活発な議論が起こるということです。一方、マイナス面は党の中で足の引っ張り合いが起きるということです。リーダーがやりたいことができない。党内抗争が激化するのです。

つまり、中選挙区制を採用すると派閥は復活するが、党内抗争が起き、国民の信頼はさらに落ちてしまい。元も子もないのです。

［結論］

それでは、どうすればよいか。

政策レベルでアプローチするならば、選挙制度を中選挙区に戻すことが手っ取り早いでしょう。しかし、中選挙区の悪影響を鑑みれば、この政策は意味を成しません。

また中選挙区制に戻すことに対して、政治家側も消極的です。

ですから、この政策面でのアプローチは現実的ではありません。

それでは、私たちはどうすればいいのか？

私は聖徳太子が17条の憲法で述べていることを今こそ考え直すべきであると考えます。

それは、

「人それぞれ考えに違いがあるので、他人と考えが違っていても怒らない」や「独断に陥らず、他者とよく議論をする」ということです。

つまり、政党レベルでも国民レベルでも同じ集団の中での批判を認めるという「寛容の精神」です。

そして、この考えこそが「和の暴走」ではなく本来の「和」なのであり、「健全な言論空間」を造出するのです

［結語］

「和」それは集団における秩序や調和を追い求めていく、良き日本文化の一つです。

しかし、その精神・文化の中には常に暴走するという危険性があるのです。

実際、現在の自民党はこの「和の暴走」の状態に入りつつあります。

だからこそ、私たちや政治家は政治参加者・有権者・代表として同じ政党内であっても様々な意見を許容すべき心を持つべきなのです。それこそが「健全な言論空間」を創造していくのです。

　ご清聴ありがとうございました。